

Uターン就職者とキャリア・アンカーに関する研究

スポーツ経営組織学ゼミナール 1313053 干鯛悠介

1. 研究動機・研究目的

地方中枢都市において、人口減少、高齢化、経済基盤の弱体化などを理由に過疎化現象が速いテンポで進行している（下平尾 1995）。その過疎化現象の対策の一つとして、江崎ら（2000）は大都市圏にいったん他出した地方圏出身者のいわゆる「Uターン」移動が重要であると述べている。日経就職ナビ（2015）がUターン就職を希望している学生に調査を行ったところ、就職活動において、人間関係を重視する学生が増えているということが示された。さらに、地元志向学生は就職活動に対し、マイナスな評価・不安感を持っており、逆に勤務地を広域に広げ就職活動を行う学生は就職活動に意欲的であると感じていることが分かった（平尾ら 2006）。また、杉山（2012）によって、地元志向学生の職業志向性を調査したところ、挑戦的な仕事より労働条件を重視していることが分かった。一方で、近年注目されている自己概念に、キャリア・アンカーがある。キャリア・アンカーとは、働き方や働く環境に関する指向性を幅広く網羅した概念である（Schein 1978）。そして、キャリアの発達レベルによって職業選択の基準が異なり、就業についての準備が整う学生は、職務挑戦や社会貢献を重視している（高良ら 2004）。しかし、Uターン就職者とキャリア・アンカーに関する研究は未だされていない。そこで、本研究では、Uターン就職者とキャリア・アンカーの関係について着目し、明らかにすることを目的にする。

2. 研究方法

【調査対象】

地方圏出身の首都圏在住の大学4年生（n=234）

【調査期間】

2016年10月1日～16日

【調査方法】

質問紙調査

①フェイスシート

（性別、出身地、出身学部、長子であるか、初職時の勤務地、就活時の希望勤務地）

② 自己診断用キャリア指向質問票

3. 主な結果と考察

Uターン就職者と非Uターン就職者をクロス集計表にまとめ、キャリア・アンカーごとに有意な偏りがあるか、カイ二乗検定を行った結果、有意な偏りは見られなかった。この結果により、Uターン就職者と非Uターン就職者によるキャリア・アンカーの偏りはないこと

が示唆された。先行研究（平尾ら 2006）では、就職に対して、地元志向の学生と、広域志向の学生で就職意識に差があると述べているが、就職活動をする前の調査である 3 年生と就職活動を終えた 4 年生であると就職に対する意識は異なり、U ターン就職者と非 U ターン就職者であまり違いが出ないのではないかと考えられる。また、追加検証でキャリア・アンカー形成過程についてインタビューしたところ、U ターン就職者（K.M）も非 U ターン就職者（A.Y）も親の影響が大きいとされており、同様のキャリア・アンカー形成過程であることから、キャリア・アンカーにも違いが生まれなかったのではないかと考える。非 U ターン就職者は、「AU（自立・独立）」の得点が高いという結果に関して、先行研究（平尾ら 2006）と同様の結果が得られた。U ターン就職者は、「LS（生活様式）」の得点が高いという結果に関して、U ターン就職者は教員や、公務員など専門的・技術的職業従事者、事務的職業が多く、吉浦らは、「LS（生活様式）」のアンカーを持つ学生は事務的職業を希望する学生が高いという結果と同様の結果が出た。U ターン就職者と非 U ターン就職者で、就職先の企業や性別などの割合が異なることも多く、そのような点から、仮説通りの結果が得られなかったのではないかと考えられる。

4. 結論

本研究から得られた結果は以下のとおりである。

- (1) U ターン就職者とキャリア・アンカーには関連がない。
- (2) 非 U ターン就職者は、U ターン就職者に比べて「AU（自立・独立）」の得点が高い。
- (3) U ターン就職者は、非 U ターン就職者に比べて「LS（生活様式）」の得点が高い。
- (4) 性差で見ると、「LS（生活様式）」の得点で有意な偏りがある。非 U ターン就職者の男性は得点が低く、U ターン就職者の女性は得点が高い。

本研究では、U ターン就職者と非 U ターン就職者との間にキャリア・アンカーの違いは見られなかったが、性差で分けた際に、有意な差が見られた。これによって U ターンをするか否かは、キャリア・アンカーの違いを生む要因にはならないという可能性が示唆された。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文を執筆するにあたり、多くの皆様のご指導ならびにご支援を承りましたことを心より感謝申し上げます。指導教官である水野基樹先生には、この 2 年間、大変お世話になりました。深く御礼申し上げます。また、本論文を執筆するにあたり、水野ゼミの院生の方々、ご多忙の中、温かく丁寧なご指導をいただきありがとうございました。そして、同期のみんな、アンケートに答えてくださった方々のおかげで無事、卒業論文を執筆することができました。心より御礼申し上げます。水野ゼミで学んだことを生かし、今後社会人になっても精進していきたいと思えます。本当にありがとうございました。